

する新鮮な感覚や新しい発見が表出されているが、この一段もそうした箇所であると
言えよう。

この里も夕立しけり浅茅生に

露のすがらぬ草の葉もなし

(源 俊頼)

これは、夕立の過ぎ去ったあとのすがすがしさを詠み得た歌として知られ、觀察の確かさにもすぐれている。平安後期の新風歌人「俊頼」の作である。

一方、恐ろしい暴威をほしのままにする
豪雨の有様も、日記・物語等の諸作品に見

られるが、その最たるものは、源氏物語の須磨・明石兩巻にわたって描かれることを一言するのみで、紙幅も超過したので筆を置く。
(お茶の水女子大学名誉教授)

雨



森下博三

雨、それは空から降ってくる水滴であつて、地上に降ってからは水という。降ってきたものが、結晶形を失わなければ雪といふ、一般的には地上に積んだものも雪というが、気象学では区別して積雪という。そしてこの雨と雪が混つて降れば「みぞれ(霰)」という。また透明な氷層と乳白色の乳層が交互になった、直径五ミリ以上の氷の塊であれば「ひょう(雹)」という。こ

れは摂氏零度以上と零度以下の気層の間をいったりきたりしたためで、雷雨のときなどにみうけられる。なお、冬に雪と一緒に降ってくる白色のもろい氷の塊を「雪あられ」といい、気温が摂氏零度よりも高いときに降るかたい氷の粒(ひょう)の小粒で、直径数ミリ以下のものを「氷あられ」といっている。そして、この雨、雪、雹、あ

つて、温かい空気におし上げられて上昇する。上昇するにしたがつて段々冷却し、

凝結して雲となる。盛んな上昇気流によってほとんど水蒸気が補充されて凝結量を増し、一層高くおし上げられて寒さにふるえながら氷になったり、雪になったりする。段々と大きくなって、気層がささえきれなくなったとき、地球に向けて下降するが、途中の気層が温かかったりすると水や雪も融けて雨となる。一滴の雨でも、出来るまでには数百粒から百万粒もの小さな雲のしずくが集まったもので、中には地表に達し、ときに五、六ミリもある非常に大きい肥満児もあり、小さいものでは直径〇・一五ミリのものもあり、これは霧雨と呼ばれる。

では、雨雲が出来るための空気の流れ方について見ると、暖かい気流が冷たい気流の上のし上って上昇する温暖前線性のもの、冷たい気流が暖かい気流の下にもぐりこんで押し上げる寒冷前線性のもの、また暖気流と寒気流の間であって、両者の勢力が優劣をつけがたい状態で、その間にあっ

てあまり移動しない前線、すなわち停滞前線などの前線性のもの。低い気圧団に対して、周囲の気圧の高い部分から流れ込んでは、中の気流が上空に逃げ場をもとめて上昇するときに起こる低気圧性。また多量に水蒸気を含んだ気流が、山脈や台地にぶち当たって上昇気流を生ずる地形性のもの。それに地上の空気が局地的に暖められて対流を起こし、急激な上昇気流によって積乱雲を形成する対流性のものなどがあげられる。

私たちの生活する日本は、四方海に囲まれた細長い島国であることは、だれしもが承知していることではあるが、気塊についてしらべてみると、五つの大きな気塊に周囲をとりまかれていて、太陽から受ける日射量によってその勢力を張る時期が区分される。

すなわち、「冬」はシベリヤ大陸に発生した寒冷で乾燥した気団が卓越し、日本海

を渡る折に多量の水蒸気を吸収し、下から暖められて変質する。それが山脈に当たって急激な上昇気流を起こし、雲を作り、温度が低いために雪となって裏日本一帯に降る。前に述べた地形性の降水であり、山を越した気塊はもとの安定した性質となつて表日本に吹きおろし、行き過ぎて太平洋まで出てまた水分と温かさによって変質して雲を作る。

「春」はシベリヤと小笠原高気圧との間を低気圧が進み、前面に温暖前線を、後面に寒冷前線をもつ関係上、低気圧性と前線性の降水を見ることがなる。また季節風が弱まり、温帯低気圧が急速に発達しながら東進し、日本海を通過するとき、それに向かって吹き込む多湿で暖かい南風によって地形性の大量の降水を見ることがある。

「梅雨期」は、冷たい北東気流であるオホーツク気団と、多湿で暖かい南の小笠原気団によって行手をはばまれ、長い間前線が

停滞状態を続け、その上を多湿となった揚子江気団（低気圧）が走るために、多量の降水の日が続くこととなる。最近ではこの梅雨現象はジェット気流と非常に関連が深いといわれるようになっていた。

「夏」は、暖かい湿った小笠原気団におわれ、それに強烈な日射を充分に受けて、局地的に空気が熱せられ、対流が生じ、盛んな上昇気流によって強大な積乱雲を作り夕立現象となる。子どもたちのよく

唄う「母さんお迎えうれいな」の雨の唄も、その意味からすればこの夕立ちを指すのではないだろうか。

「台風期」夏の終局から秋にかけて襲来する台風は、赤道方面に発生する熱帯低気圧で、高温多湿な大きな空気のウズ巻きで、海の上を走りながら充分に水分を補充し、ウズの中心から一五〇キロメートルでは自身の渦動性によるものが多く、幾分勢力が弱まった折に生ずる前線による降水が見ら

れる。また台風によって、山岳地方では南東側に地形性の大雨をみることもある。

「秋」は、日本附近が南北二つの高気圧の間に入って低圧部となり、前に述べたように低気圧性の降雨が弱く長続きする。甚だ簡略ではあるが、日本の四季をおりなす雨についての概念を述べてみた。

（東京天文台）

雨



及川 栄子

雨というと、うっとりしいイメージ……。それをいっぺんに晴らしてくれるように、色とりどりの傘をゆり動かし、色とりどりの長靴をはき、色とりどりのレインコートを着て、水たまりをパシャパシャしながら

登園して来る子どもたち。この子たちは、雨が降っても、活発にいろいろな遊びを見せてくれる。

雨降りが数日続いた日のことであった。数人の子どもたちは、洋服がぬれるのもか

まわず、ペランダに出て遊んでいた。それはペランダの屋根から落ちる雨だれが、手すりにピシャンとぶつかって水しぶきが跳上がる。その中に、子どもたちはすばやくはいりこむ。身体ごと水しぶきがかかる。